カリキュラムによって覆われる差別

― E. マーシャル『描かれる少女時代：教育と暴力の可視化』 ―

許讃榮

Elizabeth Marshall
Graphic Girlhoods: Visualizing Education and Violence
（New York：Routledge, 2018）

Chanyong HUH

1. はじめに

人種やジェンダーに関する差別など、これまで社会というシステムが作り出し内包してきた多くの差別は今、様々な人権活動や抗議によって社会問題として扱われ、多くの議論を呼んでいる。しかし多くの差別はこれまで自然なものとして社会の中に存在してしまっていたため、それらの問題を構成している要素や原因をすべて明らかにして紐解くことは困難である。本稿は児童向けの絵本や文学をテーマとして研究している Elizabeth Marshall の著作を紹介し、児童文学の中でどのように差別問題が描かれているのか、特に絵本やコミックで描かれる暴力の描写についての分析をもとに社会構造に含まれる差別問題についての彼女の指摘を概説し、それについて考察する。

彼女の研究は移民や先住民に関する問題が多く発生してきたアメリカ・カナダにおける女性差別や人種差別に関する研究である。これをそのまま日本の議論に当てはめて用いることはできないが、これは男尊女卑の風習が批判され女性の働き方や生き方について改めて見直そうという風潮が広まり、また移民受け入れについての議論が大いに広まっている今日の日本においても非常に重要で参考とすべき研究である。また内閣府は「経済財政運営と改革の基本方針2018～少子高齢化の克服による持続的な成長経路の実現」(1)において女性のさらなる社会での活躍の推進と、外国人受け入れのさらなる促進をその方針として打ち立てている。女性の働き方の変革や、今まで以上に増加する外国人の流入によって大きく変化していくであろうこれからの日本社会において、彼女の絵本と児童文学の分析の手法やそこから導き出される差別問題の要素を検討することは非常に有意義なものとなるだろう。

2. 著者について

本書の著者 Elizabeth Marshall は児童向けまたはヤングアダルト向けの文学や絵本、コミックなどのポピュラーカルチャーに関する研究をテーマとしている。

彼女は 1992 年にエヴァーグリーン大学教育学研究科の修士課程を卒業後、1992 年から 1996 年まで小学校の教師を務めた。そして 1999 年にオハイオ州のドミニカン大学の非常勤講師を務めたあと、2001 年にオハイオ州立大学教育学研究科にて博士号を取得した。2002 年から 2007 年までメリーランド大学教育学研究科で職員を務めたのち、2007 年より現在までサイモンフレーザー大学教育学部にて准教授を務めている。また現在 Association for Research in Cultures of Young People の副理事長を務めている。

本稿で取り扱う *Graphic Girlhoods: Visualizing Education and Violence*（『描かれる少女時代：教育と暴力の可視化』）は彼女の初めての単著であり、共著として出版した著作としては他に *Rethinking Popular Culture and Media*（『ポピュラーカルチャーとメディアについての再考』）（Marshall E, Sensoy O, 2016）がある。

3. 本書の概要

本書の構成は以下の通り 7 章から構成されている。

第 I 部　少女についての教育文化
　第１章　意地悪な女の子に関する描写
　第２章　「良い白人」の少女
　第３章　レイプカルチャー：赤ずきんと制服に関する校則

第 II 部　抵抗する「女子生徒」
　第４章　Lynda Barry のコミックとトラウマ
　第５章　自伝絵本に描かれる全寮制の学校
　第６章　社会的な暴力と正義
　第７章　「少女として物語を読む」

本著の主題は少女の教育に暴力が非常に大きな位置を占めているということを明らかにするものであり、グラフィックテキストの中に描かれる女性の受ける差別や性暴力の描写を検討することで、今日の女性が受ける暴力の所在を明らかにする。彼女は女性に対する暴力やセクシャルハラスメントが社会構造そのものから発せられるものであり、様々な誤った女性に対する考え方や理解が本質的な問題を覆ってしまっていると主張する。

第 I 部では女性の受ける暴力やセクシャルハラスメントを覆い隠してしまうものが何かを明らかにするために児童向けの絵本やコミックの描写を検討し、学校内でのいじめ問題や、人種差別、男性優位性がヴェールとなっていると主張する。第 II 部では実際にそれらが覆い隠してしまっている、社会構造そのものが持つ女性への暴力性を、自伝的な絵本や漫画の検討から考察する。

3.1. 教育に埋め込まれた女性への暴力

第 I 部の３つの章では女性に対する暴力がどういったものであるかを明らかにし、またそれらの暴力が様々なヴェールによって覆い隠され日々の中で一般化されているかを児童文学や絵本を通して分析し論じている。

第１章ではしばしば物語で描かれる「意地悪な女の子」の描写を検討することで、学校内でのいじめ問題に注目が集まることでそのいじめ問題の捉えられ方に含まれる女性に対する偏見や誤解が改められることなく受け入れられてしまっていることが指摘される。「いじめ」は様々な子供向けの絵本や文学の中で描かれているテーマだが、男子と女子のいじめの描写には大きな差がある。著者は Patrice と Ashley(2016)の研究を引用し、いじめに関する絵本の中で身体的な攻撃を行うのは男子 48.1%、女子 48.6%とほとんど変わらないのに対して、友達を仲間はずれにするなどのコミュニティからの締め出しのようないじめを行う描写がされる割合は男子が 9.5%で女子は 28.3%となっている。このことから女子は男子のように身体的ないじめを行うだけでなく仲間はずれにしたり悪い噂話をしたりといったやり方のいじめが男子に比べると圧倒的に多く描写される。女性は男性とは反対に身体的な攻撃性よりも精神的/間接的な攻撃性を持つ、というステレオタイプな誤ったジェンダー理解は非常に根深いものであると本著は指摘する。

また意地悪な女の子に関する描写は、アメリカでのいじめ問題への関心の増加と密接に結びついている。1999 年のコロンバイン高校銃乱射事件(2)やそれ以降の多くのインターネットを介したいじめなどは無視できない状態になっており、2011 年にいじめ防止のカンファレンスがホワイトハウスで開かれ、いじめ問題に関する児童文学とヤングアダルト文学(3)が増加した。2013 年のニューヨークタイムスによれば、2012 年にインターネットの図書館カタログである WorldCat に登録されている英語の本で「いじめ」がタグ付けされている作品は 1291 作品あり、これはこの 10 年間で 500 冊も増加している。著者はいじめにあう女の子の物語として *The Hundred Dresses*（Estes 1944）という挿絵付きの児童小説を紹介する。これはポーランド移民のワンダがミドルクラスの白人の女の子たちのグループから受けたいじめについての物語で、無自覚にワンダをからかっていたペギーとマディーはワンダが別の街に引っ越すときに残した「もう自分のことをポーランド人と呼んだり、変な名前だと言わないところに行く」という言葉から自分たちのしてきた行いに気づきワンダに謝り、ワンダも二人を許すという結末を迎える。この中で意地悪な少女たちは脆弱でもろく、そして更生可能な存在として描かれ、優しさを教えるための教材として機能する。そして少女たちの行ったいじめが本質的な意地悪さから

出たものではなくて自分と違うものに対する無理解や不寛容さから生まれたものにすぎないことを描写している。

しかし多くのいじめに関する物語ではこうした少女たちの意地悪な行動の根源が何であるかきちんと描写されていることが少なく、いじめ問題がしばしば個人の成長や教師の介入によって優しさを身につけ、いじめられた子がいじめっ子を許すという描写によっていじめ問題が個人の成長や、教育に関係する問題であると認識されてしまう。そうしたいじめ描写に潜む女性に対する誤解や人種・宗教の違いに対する不寛容さや差別的な感情が見過ごされたまま、社会全体の承認を得て学校のカリキュラムとなってしまう危険性がここでは指摘される。いじめ問題に社会が注目し、カリキュラム化してしまうことでその前提となっている誤ったステレオタイプな女性像が社会通念の中で一般化されてしまうと本書は述べる。

第２章では自立した強い女性という耳障りの良いアイコンによって、児童向け文学のなかに埋め込まれた白人至上主義と植民地主義が見過ごされてしまっていることを、女子に非常に人気のある「少女探偵ナンシー」シリーズの分析から指摘する。少女探偵ナンシーシリーズは1930年からEdward Stratemeyerによって書き始められ、今日までCarolyn Keeneの名義で複数の執筆者が引き継ぎながら書いているシリーズである。ナンシーは白人の活発な16歳の女の子であり、彼女の元には人探しや紛失物の探し物などの依頼が舞い込んでくる。本稿では特に彼女が依頼解決のために海外へ行く際の描写について分析する。ナンシーはトルコや中国、インドなど様々な国へ行き、そこで出会った少女と仲良くなり、そしてその少女が抱えている問題を解決する。そうした海外でのナンシーの活躍によって、先進国である西洋と後進国である東洋という対比関係が描写されていると著者は指摘する。それは例えばトルコでの女性の服装に対する描写からもうかがえる。ナンシーはトルコ人の女性が目以外の頭をすっぽりと布で覆っているのを見てそのことを父親に話し、そして父親は「1923年にトルコが共和国化される前まで女性はそのような服装でいなければいけなかった。しかし今では多くの人々が西洋的な服を着用している」とかつてのトルコのおかしな慣習が西洋化によって改められたという説明をする。

そしてこのように海外で起こる出来事がすべて「先進国」の白人の女の子であるナンシーの視点から語られ、後進国を訪れたナンシーがその国の女の子を助けるというストーリーが描かれることによって、アメリカの白人主義と植民地主義的な考えや西洋文化との統合を一般的なものとして読者に刷り込んでしまった。ナンシーが他国の少女を助けるという描写のなかで、ナンシーの持つ優しさが人種差別的な暴力を覆い隠してしまっているのだと著者は論じる。しかしこうした白人の優位性を含んだ描写が批判される一方で、少女探偵ナンシーシリーズは力強く、自ら戦うことのできる少女のアイコンとして非常に多くの称賛を得ており、フェミニズムに関する論議の中でも一つの重要なトピックとして扱われている。少女探偵ナンシーはフェミニストたちの良いロールモデルであるかもしれないが、それはすべての女性にとっての良いロールモデルではなく、自立した良い女性というアイコンとしてナンシーが賞賛され話題にのぼり続けることで、そこで描かれる白人優位という暴力が見過ごされ存続してしまっている。

第２章で著者はこうした白人優位主義が、「力強く自立した女の子」というイメージによって覆い隠されてしまっていることを指摘したが、こうした「良いもの」によって差別的問題が覆い隠されてしまうということが他にも存在しているとも指摘する。第３章では女性に対するセクシャルハラスメントや性暴力が社会構造上の問題であるにもかかわらず、女性にも責任のあるものとして捉えられてしまっているということを、様々な改案をされ描かれた「赤ずきん」の持つ教訓についての分析と女子学生に対する服装の校則とを結びつけることで明らかにする。

Zipes (1993) はペローとグリム兄弟によって口頭の伝承だった物語が教訓的な寓話となり、そしてその中で若い女性のレイプや殺人の被害がヒロインの責任となってしまったと主張する。赤ずきんはおばあちゃんの家に行く時に道草をしてはいけないと言われる。しかし赤ずきんは狼にそそのかされて森で花を摘んで遊日、最後には狼に騙されて食べられてしまう。本来は殺人や性的暴力を振るう狼/男性がすべての過失を負うべきだが、赤ずきんが言いつけを破って森へと入っていったために狼に襲われてしまうという教訓的な寓話となったことで、狼の暴力が赤ずきんにも責任のあるものと描写されてしまう。こうした女性が性暴力の責任の一端を負わされている「レイプカルチャー」は今日の学校教育の中でも存在している。赤ずきんで描かれるレイプカルチャーは学校での女子生徒の服装に関する規定と共通しており、例えば体育の授業中にヨガパンツを履くのは興奮してしまうので禁止される、というようなことがある（Wallace 2017）。学校では女性の体や素肌はセクシュアリティのシンボルであり、男子学生からのセクシャルハラスメントを避けたければそれらを覆い隠せと教えられ、女性に対する男性の暴力の責任を、被害者である女性も負わされていると指摘する。こうした教育は今日の学校では非常に一般的なことであり、男性の暴力の責任を女性にも負わせるという男性の特権がカリキュラムの中で日々生徒たちに教えられていると著者は述べる。

この指摘の補強と、レイプカルチャーに対する抵抗の例として著者は *little red hood*（Marjolaine 2010）を紹介する。この絵本は白を背景として黒と赤の２色の鉛筆だけで描かれていて、読者がグリム童話やペロー童話の赤ずきんを知っているという前提で、物語の細かな部分を可能な限り削ぎ落としている。絵本の中でおばあちゃんの家や狼のねぐら、森は描かれず、ただ白い背景の中で赤ずきんと狼が一緒に歩いている。赤ずきんが狼の口を覗き込んで「大きな口ね！」というと狼が「お前を食べるためさ！」と返すが赤ずきんは「いや！」と返す。狼は驚いて「いや？」と尋ね返し赤ずきんは「そのくさすぎる息を何とかして！」という。そして甘いキャンディを食べさせ、狼はキャンディを喉に詰まらせて死んでしまう。このストーリーは赤ずきんが何も悪いことをしていないということ、白く何も描かれていない背景によって森という暗く危険な場所ではなくどんな場所でも狼の暴力が存在することを強調する。暴力はどこでも起こりうることであり男性の暴力の結果であって（正しい/正しくないに関わらず）少女の選択によるものではなく、少女には一切の責任がない、ということを示し、女性のレイプカルチャーに対して批判するものであると著者は論ずる。こうしたレイプカルチャーが含む、社会全体に広まった男性優位性に対する女性たちの抵抗については第Ⅱ部でより詳しく述べられる。

3.2. 暴力に対する告発と抵抗

第Ⅱ部では、第３章で言及された女性たちの暴力への抵抗に焦点が当てられる。性的・人種的差別による暴力を受けた経験がどのような形で絵本や自伝的コミックなどで発露され既存の教育システムに対してどのような抵抗をしているかを分析する。

第４章はLynda Barryのコミック One! Hundred! Demons!(2002)と *What it is*(2008)を取り上げ、作者が自身の受けた性暴力やそのトラウマに対してどのように向き合うのかを分析する。トラウマは忘れたくても決して忘れられないものであるとBarryは描写し、自らの少女時代をコミックで美化することなく己の隣人として描くことで、大人と子供に対する既存の考えを改める必要があるとしている。例えばディケンズのクリスマスキャロルのような道徳的な物語は、素晴らしい大人への過渡期の一部としての少年時代の痛みを強調する。そのカリキュラムは優しさと従順さと苦しみを通して、良い人間が最終的には勝つのだ、というものだ。Barryはこれが幻想にすぎないことを知っており、少年時代に受けた痛みには忘れようと思っても忘れることもできないものがあり、そうした痛みを大人になるにつれ忘れるよう子供に求めるべきでないとして、子供から大人への成長に対する単純な考え方に反論する。子供を大人よりも知識や考えの浅いものとして考えるのではなく、そこで受けたトラウマをより深く受け止め、そしてそのトラウマが癒すことのできないものであり、単純にそれを克服し成長することはできないと描く。

第５章は学校というシステムが持つ白人優位的な側面を、メキシコ系アメリカ人の被差別経験を描いた *Separate Is Never Equal: Sylvia Mendez and Her Family's Fight for Desegregation*（Duncan 2014）、アメリカ南部の黒人少女が主人公の *Through My Eyes*（Bridges 1999）、イヌイットが全寮制学校に入れられ民族文化を失う危機に瀕する *When I Was Eight*(Christy 2013)の３つの自伝を分析し、この章で分析される人種差別やジェンダー差別が白人を中心とした現存の教育制度から生まれていることを指摘している。

Duncanの *Separate Is Never Equal* では主人公のシルビアがアメリカの市民権を持ち、英語にも一切の不自由がなかったにもかかわらず地元の公立学校への入学許可が出ずにメキシカンスクールへ通うことになる。シルビアとその家族は人種差別撤廃のために立ち上がるヒーローとしてではなく、人種や民族によって人々をひとまとめにしてしまう社会構造にもがく小さな存在として描かれる。Bridgesの *Through My Eyes* は人種を理由とした隔離が違憲とされるブラウン対教育委員会裁判の判決が出た1954年以降も依然として黒人差別が色濃く残るルイジアナ州の小学校に入学した経験をもとに、当時の新聞記事や写真、また当時の白人教師にもインタビューを行い、その当時の社会全体が共有していた差別感情を描き出した。Christyの *When I Was Eight* では先住民族の文化を消滅させ文化統合をするための最も効果的な手段として先住民たちの子供をターゲットにした文化政策が行われていたことが示され、先住民の子供たちは半ば強制的に家族から引き離され全寮制の学校に入学し、新しい西洋風の洗礼名をつけられ日々の習慣や振る舞い全てを根本から変えようとする、西洋中心主義的な教育システムが批判される。この３つの自伝の作者たちは白人の特権とレイシズムを可視化しようとし、第２章で分析された少女探偵ナンシーのようによく知られた「良い白人」の女の子に代表され

る白人至上主義を"white fantasy"と表現し、彼らの伝記が今なお継続するアメリカ社会の根底にある差別的な人種観を明らかにしており、批判的人種理論(4)を支持し強化すると著者は論じる。

第６章はSearleが第２次世界大戦の中で受けた自らのトラウマを彼の著作「聖トリニアン女学校」（1948）シリーズの中の女子生徒たちに託したことを例に挙げ、自らのトラウマや社会問題に対する問題提起のために女子生徒が作中に配置されること、またひどい目にあう女子生徒という描写が、学校の内外を問わずに起こっている暴力と不公平性を告発する手段として非常に有効だと述べる。Searleは第１作目を書いた後に従軍し、第２次世界大戦の際に日本軍の捕虜となり、タイの鉄道工事に従事させられた。そこでマラリアやその他の疾患、日々の日本兵からの暴力などに苦しみながら、隠れてその時の日本兵や他の捕虜たちの絵を描き、それをコミックとして出版した。１作目で登場する少女たちはいわゆる普通のフィールドホッケーを楽しむ少女たちだったが、Searleの従軍ののちに出版した２作目以降はガラリと雰囲気が変わってしまう。少女たちはホッケースティックで相手のチームを叩きのめし、教師さえもロープで首をつって殺してしまう。Webb（1959）はSearleの女子学生の描写について、「理解しやすく面白そうに見えるように、恐ろしさを除去するために」女子学生という図象を用いたと述べている。自らの拷問や暴力と言った経験を凝縮し、トラウマに関する教育を広く届けるための身代わりとして女子学生という図象が使われた。女子学生という図象を用いたのは偶然ではなく、Searleは教育や暴力は懲罰などが混じり合うものとして女子学生の体という図象を用いたのだと著者は述べる。ここで身代わりとされた女子学生は暴力と、そしてトラウマの克服不可能性を証言している。Searleの体験した収監と侮辱と苦しみは学校という収容所とある種似た場所を舞台として痛烈に描かれる。ここからSearleが戦争によって受けた恐ろしく悲惨な出来事と、学校やカリキュラムの中に存在する暴力性を結びつけて描いていたと著者は読み取る。

第７章で著者はヒラリー・クリントンの大統領選での評価が「ハリー・ポッター」（J.K.Rowling 1997）シリーズの登場人物であるハーマイオニー・グレンジャーとしばしば比較されるものであったことに着目する。そしてハーマイオニーのような男性の座を奪ってしまいかねない力強く聡明な女子生徒という描写から、児童文学・ヤングアダルト文学・ポピュラーカルチャーや主流なメディアなどにおいて女性蔑視がどのように環境作られているかに注目し、女性が声を上げ、偏見や差別に抵抗することの難しさを指摘する。そしてこれまで分析した絵本やコミックの中での女の子の描写から見られる性差別や人種差別の問題点をまとめ、どのような問題が社会構造の中に内包されていて常に女性を脅かしているかを論じる。

著者はまず*The Atlantic Monthly* 2000年５月号の表紙を紹介する。教室で意気揚々と高く手を挙げて発表しようとする女子生徒の絵が大きく描かれていて、そしてその後ろの席では男の子が少し不満げに腕を組んでだらしなく座っている。この絵を例として、著者は女子生徒が教室内で男子生徒よりも目立ち、彼らを圧倒することに対する男性が抵抗感を抱いているのではないかと推測する。そして「ハリー・ポッター」シリーズでの主要人物であるハーマイオニーの描写について、彼女が高圧的な声をしていて、もじゃもじゃの茶髪の、かなり出っ歯の女の子であり、そんな彼女は彼女自身がのろまでないことを証明するために授業中腕がちぎれん

ばかりに高く手を挙げて発表をしようとし、また友人のハリーとロンにトラブルを避けるためにあれこれと指示をする、男子よりも力強い女子生徒の典型的な姿として描写されていると述べる。そしてこの *The Atlantic Monthly* の表紙やハリー・ポッターシリーズでの力強い女子生徒の描写が、ヒラリー・クリントンに対するメディアの反応と強く関連していると論じる。ニューヨークで開かれた８年目の世界女性サミットでヒラリーが「新たな闇の魔術に対する防衛術の教師となることを、少なくとも私たちは望んでいる」と、彼女の能力や姿勢が評価される一方で、*What Went Wrong Hermione Clinton*（Wilson 2008）と題されたニューヨークタイムスの社説では「ヒラリーがあまりにも賢く、強く、積極的で合理的で、競争心のある女性のカリカチュアになってしまっている。ハリーとロンが初めてハーマイオニーに出会った時にどのような反応をしたかを考えるべきだ」と評され、男性以上に極めて有能な女性に対して冷ややかな視点で語られていて、男性がそうした強い女性像は社会的な暴力による被害者というよりもむしろ自分たちを脅かすような存在として認識していると述べる。また韓国系アメリカ人の Lela Lee が自らの 1990 年代に受けた差別体験をもとに描いたコミック Angry Little Girl シリーズは女性が声を上げて抵抗することの難しさ、社会通念として「良い女性」というイメージがどういうものかを表している。女性が声を上げると無視されるか、笑われるか、敵意や批判が集中し、女性はそうした自らの主張が黙殺され弾劾される状況が一般的に広まっているため、「賢い」女性は面倒ごとを避け、わざわざ声を上げるのではなく黙って耐える方が楽だと Lee は描く。メディアや文学など、社会全体に蔓延する男性以上に活躍する女性への蔑視や男性の持つ既存のジェンダー的な特権を失うかもしれないという恐れが女性の抵抗を抑圧していると著者は述べる。

本書は前半のⅠ部で少女探偵ナンシーシリーズや赤ずきんといった少女が主人公となる児童文学の描写を見ていくことで、いじめ問題や教訓的な寓話などの様々な文化的な教示がかえって社会通念の中に含まれている暴力を隠してしまっていることを明らかにし、また後半のⅡ部でそれに抵抗する形で様々な自伝的な絵本やコミックが登場し、人種問題やジェンダー差別を批判する。アメリカ社会では今でも女性蔑視や人種差別の問題は残っているが、それに対して暴力の行為者ではなく、暴力の被害者の視点でより一層語られ、議論していく必要があると著者は主張する。

4. 考察

著者はグラフィックテキストに描かれる暴力の可視化を通じて、社会構造の中に潜む人種・ジェンダー差別を構成する要素として大きく３つの問題を示した。第一に児童文学としてしばしば描かれるテーマであるいじめ問題が結果として「女子は身体ではなく精神的ないじめを行う」という偏見を助長させているということだった。つまり児童文学といじめ問題は非常に密接な関係にあり、それゆえに読者や学校から多くの注目を浴びて議論の中心とされてるために、その前提とされている女子生徒のいじめの発露に対する偏見が見落とされていると彼女は厳し

く指摘しているのである。第二に人種問題に対する無配慮な描写が批判されていながらも非常に人気のある「少女探偵ナンシー」シリーズが、力強く、独立した女性というフェミニズム的に非常に価値のあるアイコンとなってしまっているためにそうした人種差別的な描写がないがしろにされてしまっているという指摘である。このように本来批判されるべき差別的な描写を含む作品が、他の差別問題にとってはポジティブな内容を多く含むものであったために見過ごされ歓迎されることで肯定されてしまう。ある差別問題に対して対抗しようとする時こそ盲目的にその問題のみに向き合うのではなく、付随する別種の問題についても考慮する必要がある。第三は赤ずきんの物語が女性が男性から襲われないための振る舞いという教訓的な寓話となったことで、かえって女性に性暴力の責任の一端を負わせてしまっているという指摘である。これらはどれも、子供ののために良かれと思って行われる教育や差別をなくそうとするための描写がジェンダー差別や人種差別という問題を常に内包しており、カリキュラム化されて常に子供たちの行動や思考の中に刷り込まれているという指摘であり本書の大きな成果と言えるだろう。差別問題に向き合うためには、既存の教育そのものに無数の差別が内包されていることを認める必要があると本書は示唆している。また７章のヒラリークリントンとハーマイオニーの関係付けられ方から示されたように、メディアや社会は絵本や児童文学、コミックなどで描かれる女性像を現実の女性像と結びつけて考えており、物語の中の女性に関する描写が現実世界での女性の抑圧を示しているということがより説得的に述べられている。

一方で彼女のジェンダー問題についての議論には男性の視点からの差別や抑圧的な描写についての分析と検討がなされていないという懸念がある。ジェンダー問題や人種差別問題は彼女が本書で述べている通り多くの女性を苦しめてきた問題であるが、男性もまたこの問題に苦しめられてきたことには留意する必要があるだろう。男性にも男性特有のいじめ描写やジェンダー描写が存在していて、例えば著者1が第１章で述べたように絵本や児童文学の中で男の子は身体的ないじめを行う存在として描かれており、それが自然なものとされてしまっている。また自己主張があまりできず内向的な男の子はしばしば「女々しい」男として周囲の子供から馬鹿にされることもある。このように女の子だけでなく男の子もジェンダー的な偏見を押し付けられている。ジェンダー差別には異性からのものと同性からによるものの両方が存在し、そこにはさらに性自認や社会的なジェンダー的規範の受容の個人差など、複雑な要素が関わりあっている。男性と女性という単純な二項対立だけでジェンダー問題を構成する要素を明らかにしようとすることは難しく、本書で得られた女性視点からの優れた分析を引き継ぎつつ、より複雑に入り組んだジェンダー差別についての議論を進めていく必要があるだろう。

そして著者は人種差別やジェンダー差別といった暴力が社会システムのうちに既に組み込まれていることから、自らの暴力に無自覚な加害者の視点ではなく、その被害者の視点から人種問題やジェンダー問題について語ることの重要性を論じたが、加害者からの視点の描写を検討することからも、彼らがどういった点において自らの暴力に自覚的であるか、あるいはそれをどのようにコントロールすることを望んでいるのかといったことを明らかにできるはずだ。また差別を生み出した側の視点について分析し、彼らがその差別を社会システムの中に組み込んだ際にどのようにその行為を正当化していったかを明らかにすることで、差別や教育の中の暴

力がどういう要素から成立しているのかをより詳しく検討することができる。その検討をせずに議論を進めることによって生まれてしまうのは「暴力の加害者」というレッテルを貼られてしまった男性像や白人像であり、それは今まで差別の被害者が受けてきた仕打ちや社会的不公平さを、逆の立場から彼らに向けてしまうだけにとどまってしまいかねない。著者の研究の目指す先の、暴力や差別が取り除かれた社会の実現のためには、やはり被害者と加害者の両方の視点からの分析が必要である。

しかし彼女の示した社会構造の中に潜む暴力や、いじめ問題やフェミニズム的アイコンによってかえって児童文学がその差別や暴力を自ら覆い隠してしまっているという指摘は非常に鋭いものである。カリキュラムの中に埋め込まれた暴力は、それに基づいた教育を受けた人々からすればそれが当然なものであるために視覚化しにくく、また問題提起が難しい。彼女の提示した事実は今後のジェンダー問題や人種問題を考えていく上で非常に重要である。差別問題の最終的な決着に必要なことはこうした差別的な描写の検討から見えてくる社会構造上の暴力をどうやって取り除くか、ということであり、その議論の準備段階として社会構造上の暴力の要素が児童向けの絵本や文学の描写の検討を通して明らかにしたことは本書の大きな成果である。

そしてこれはアメリカ社会だけではなく日本においても共通する非常に重要な示唆である。今日の日本でも様々な場面で男女平等であるとは言えず、会社での男性と女性の育児休暇取得率や取得する際の対応の差や事務職と総合職の男女比の差など、男女共同参画社会や女性の働き方改革が推進されていながらも多くのジェンダー差別が残っている。またこれから本格的に外国人を人材として取り入れていこうとしている中で、例えば外国人留学生や外国人技能実習生をただの過酷な肉体労働や法令を無視した業務に従事させているといったニュースがしばしば報道され、彼らを単なる労働力としてしか見ていないような日本社会が人種的差別に対して敏感でそれを身近なものとして考えているとは言い難い。これまで以上に人種的な問題やジェンダー差別についての人々の意識改革や法的な改正についての議論が必要不可欠となっていくであろう日本社会において、著者の絵本や児童文学の分析の手法やそこから導き出された差別のメカニズムについて検討することは非常に有意義なものである。

〈注〉

(1)　平成30年6月15日 閣議決定

(2)　コロラド州コンバイン高校で1999年4月20日に起こった銃乱射事件で、学校で日常的にいじめられていた2人の生徒が12人の生徒と1人の教師を殺害し、その後自殺した事件。

(3)　ヤングアダルト文学とは英語圏における児童文学と文学の間に設けられたカテゴリーであり、多くの日本の図書館でもYA文学等の呼称でコーナーが設置されており、多くの場合13〜18歳の読者をその対象年齢層として想定している。

(4) 批判的人種理論において人種的抑圧とその他のジェンダーや移民の地位、名前、生物学的な特質や訛りなどは不可分なものとして取り扱われ、白人中心主義的な教育制度に依拠した現存の教育は中立なものではないとされる。

〈文献〉

Barry, Lynda, 2002, *One Hundred Demons*, Seattle：Sasquatch Books.

———, 2008, *What It Is*, Quebec：Drawn and Quarterly.

Bridges, Ruby, 1999, *Through My Eyes*, New York：Scholastic Press.

Estes, Eleanor, Slobodkin, Louis, 1944, *The Hundred Dresses*, California：Harcourt, Brace & World, Inc.

桧垣伸次， 2011，「批判的人種理論（Critical Race Theory）の現在」『同志社法學』63 (2): 929-982.

Jordan-Fenton, Christy, Pokiak-Fenton, Margaret and Grimard, Gabrielle, 2013, *When I Was Eight*, Tronto：Annick Press.

Leray, Marjolaine, 2010, *little red hood*, London：Phoenix Yard Books.

Oppliger, Patrice A, Davis, Ashley, 2016, "Portrayals of Bullying: A Content Analysis of Picture Books for Preschoolers", *Early Childhood Education Journal,* 44（5）：515-526. New York：Springer.

Rowling, J.K., 1997, *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*, Arthur A. Levine Books, New York：Scholastic.

Searle, Ronald,1948, *Hurrah for St. Trinian's and Other Lapses*, London：MacDonald, & Co.

Tonatiuh, Duncan, 2014, *Separate Is Never Equal: Sylvia Mendez & Her Family's Fight for Desegregation*, New York：Harry N. Abrams.

Wallace, Kelly, 2017, "Do School Dress Codes End Up Body-Shaming Girls?", CNN, 30 May 2017.

Webb, Kaye ed., 1959, *The St. Trinian's Story*, Perpetua Books.

Wilson, Heather, 2008, "What Went Wrong | Hermione Clinton", The New York Times, 8 June 2008.

Zipes, Jack, 1993, *The Trials and Tribulations of Little Red Riding Hood*: Versions of the Tale in Sociocultural Context 2nd ed., New York：Routledge.